

「シャトー・サカグチ」 —東京外語会パリ支部だより

沼田睦子（昭44）

創刊された仏友会誌 La Nouvelle にパリからの寄稿にも一隅を割いて下さるとのお誘いを頂きました。第一報はパリ外語会の近況を巡る話題で始めたく存じます。題して「シャトー・サカグチ」。

2001年秋、恩師故田島宏先生が府中新キャンパスへの移転と母校創立百周年記念会館本郷サテライトオープンという二大慶事の報告を携えて訪仏されたのを契機に、休眠状態だったパリ外語会が再興されたことについては「東京外語会会報」を通してお話してきました。その後、一年も欠かすことなく懇親会が開かれています。常に登録会員数30人を下らず、2005年から2006年にかけては最多数の38名を数えるまでになったものの、以降、帰任・転任が相次ぎ、昨2008年、偶々七夕の夕刻に開催されることになった同窓会のため名簿を更新した時は22名になってしまいました。時あたかも、江戸末期に締結された日仏修好通商条約150周年を記念してパリは日本の文化財展示や伝統芸能上演、日仏経済交流行事等に賑わっていましたから、日仏関係が低調に向かっているわけではなく、また、帰任・転任された同窓生が務めていらした各界のポストが凍結されたとも聞きませぬので、在仏同窓生の激減は単なる偶然に過ぎません。それでも、私のような定住者は、パリで友誼を得た同窓生がひとり、ふたりと発たれる度、一抹の寂しさを禁じ得ず、思いついて、離仏された方々をリストアップしてみたのです。2001年来54名にのびりました。

この2008年七夕、1900年万国博覧会に南仏から集客のためパリ・リヨン駅舎が改築された折に建設されたベルエポック様式の華麗な遺構 Le train bleu レストランでの夕食会が最近の同窓会です。故田島先生をお迎えして以来久々に、定年ご退官後パリ大学国際シテ日本館館長に就任された西永良成教授、在仏日本大使館公使に出向された渡邊啓貴教授（昭53）、おふたりの先生のご臨席を得て、出席率の跳ね上がる盛会となりました。

同窓会開催で特筆したいのは、2007年12月1日、同窓生仲間では通称シャトー・サカグチ、公称シャトー・デ・クロ Château des clos、オーナー坂口功一氏（昭44）が経営されるシャトーホテル落成を祝って開かれた会です。



シャトー・デ・クロは、パリの南東、近郊高速メトロ（RER）B線終着駅の彼方、シュヴルーズ溪谷に広がる森林田園地帯の町のひとつ、パリからほぼ50kmのボンネル Bonnelles にあり、この地域はパリ、ヴェルサイユ、ランブイエに近い地理的条件から中世・近世には王家縁の大貴族の領地となって町村が発展し、19世紀以降はパリの富裕ブルジョアジーも邸宅を建設するようになりました。

荘園デ・クロの名は17世紀半ばから土地登記簿に記帳が見られ、1660年にはルイ14世の財務大臣コルベールの義兄が購入、その後大貴族二家の領有を経て19世紀前葉、法服貴族ド・トレムモンの所有となり、初めて城館が建立されます。シャトー・デ・クロの誕生です。ド・トレムモン家時代は中央棟のみ、両翼棟が増築されて城館が現在の姿になるのは、20世紀に入ってから、ヨーロッパ製鉄業の先駆者テオドール・ローランが城館の主となって後1929年です。城館の由緒に前置きが長くなりましたが、ローラン家が売りに出していた外壁内部共かなり荒れた姿のシャトー・デ・クロを2002年、自身も居住するシャトーでシャトーホテルを経営するという企画をいっていた坂口さんが購入されたのです。

購入後は、建築士を介在させずにご自身で修復改装の図面を引き、資材を選び、ご夫人とご長男と共に各施工業者を陣頭指揮、インテリアもすべて坂口夫人が調達し、そのため竣工まで5年余の歳月がかかった、と伺いました。

2007年に落成した瀟洒なシャトーホテルは、花園と広大な森林5ヘクタールに囲まれ、結婚披露、慶祝行事、企業セミナー等開催用サロンに併せて宿泊施設を擁しています。坂口さんはワイン輸出、とりわけブルゴーニュ貴酒の醸造蔵を日本に向けて開くことに成功された方と仄聞していますが、もし、このシャトー購入とシャトーホテル落成が成功の札束

2008年度第86回外語祭フランス語劇『愛と偶然の戯れ』（マリヴォー作）を見て

松本伸夫（昭38）

2008年11月21日、東京外語府中キャンパスで開催中の伝統ある語劇祭でフランス語劇『愛と偶然の戯れ』を観賞した。仏友会から同席したのは前副会長の菅原恵美子さん（昭42）、現副会長の相馬寿美乃さん（昭39）と私の3人。数年前から仏友会有志がフランス語劇の制作者たちに舞台裏でお祝い金を贈ってきたが、今回初めてフランス語科教授として語劇に深く関わってこれ、仏友会副会長でもある川口裕司先生を通じて、語劇スタッフと接触。代表兼出演者でもある亀井雄一郎君の了解のもと、終演後のカーテンコールで仏友会会員が壇上に登って、演出の佐藤礼菜さんに3万円の祝い金を菅原さんから手渡すことができた。これをきっかけ今後表舞台の壇上で祝い金贈呈を恒例化して、フランス語科現役生に同窓会組織としての仏友会の存在を印象付けたいと願っている。



18世紀中頃に作られた『愛と偶然の戯れ』は、いかにもフランス的なしゃれた愛の言葉が飛び交うイタリア風喜劇。機智に富んだ即興的なセリフ回しが多いので、2年生が取り上げるお芝居としては難しすぎる印象をもったが、それを見事にカバーしてくれたのが簡潔な字幕だった。

フランス語によるお芝居の熱気がむんむんする語劇の舞台に立った私にも45年以上昔の1961年にラシーヌの『フェードル』でテゼ役を演じた興奮がよみがえってきた。そのとき指導を受けたのがフランス留学帰りの非常勤講師、渡辺守章先生（現東大名誉教授）だった。そのすばらしい美声の朗読ぶりもいまだに深く耳に焼きついている。フランス語関係者のなかで、クロードレルの研究家であると同時に前衛的な演出家としての渡辺教授の現在までの活躍ぶりを知らない人はいないだろう。そんな縁を作ってくれたフランス語劇に改めて感謝の念を抱くとともに、来年もフランス語劇を見に行きたいとの思いをつのらせている。

を積んでの業者任せの発注事業だったのなら、財力があればできる、それだけのことで、シャトー・デ・クロを見る賛嘆の思いに大きな感動は伴わないのではないかと思います。城門から城館まで上下水道配管・電気配線を地中に埋めるため、ツルハシの最初の一撃を坂口さんが土に打ち込んだ、それが工事開始だった、そう知ると、シャトー・デ・クロは一層壮麗に屹立します。

落成祝賀同窓会では一同、坂口さんの壮挙に杯を挙げました。供されたブルゴーニュは正に美酒でした。百聞は一見に如かず、と言います。

<http://www.chateaudesclos.com/> 緑濃い林間に白亜の城館が出現します。

* * *

— PROFIL —

仏科52年卒、小幡君枝と申します。趣味が高じて、数年前より「フランス語で歌うシャンソン歌手」になりました。現在、恵比寿駅西口にあるライブハウスで定期的に歌っております。昨年12月末のライブには、仏友会会長神奈川孝子さん始め、仏科の諸先輩方が多勢応援に来て下さいました。母校の方々の応援はうれしい限りです。今シャンソンは静かなブームです。原語で歌う楽しさを伝えたいと、都内及び千葉でシャンソン教室も始めました。教室の名称はNouvelle Porte、私にとっての、人生の「新しい扉」でもあります。



第13回サロン仏友会開催 ～講演とボジョレヌヴォを楽しむ会～

秋も深まった11月22日（土）、本郷サテライトで、秋のサロン仏友会が開催されました。第1部が、F. ルーセル先生による講演会（4階）、第2部は懇親パーティ（8階）でした。

講演会の講師が、サロン仏友会初のフランス人ということもあってか、会場はもうこれ以上は収容できないというくらいの67名の参加者で溢れました。

第1部は川口先生のルーセル先生紹介で始まりましたが、演題は「フランスの今、日本の今（Les impressions d'un Français du Japon）」で、最近のフランス事情も踏まえ、多岐にわたるお話を聞くことができました。先生は、東京外語大客員教授（日本教育史、フランス語教育法）ですが、マルセイユご出身で、日本人女性と結婚、2人のお子さんがおられ日本在住も長く、日本語も流暢です。ヴァカンスはマルセイユに帰国、フランスの最新情報をこの日のために収集していただきました。

盛りだくさんのお話の中でも、フランスでは、ディズニールランド・リゾート・パリに行ったと言うのをためらう大人がいるが、サルコジ大統領が、2度目の夫人である歌手のカーラ・ブルーニをマスコミに披露したのがディズニールであったとか、パリ市内で渋滞解消に一役買っているレンタル自転車（Velib）の話題、さらには上昇する出生率が結婚の新制度PACS(Pacte civil de solidarité、結婚に準ずる結婚よりも制約の少ない、カップルの新しい形態）と関わりがあるなど興味深い話は印象的でした。男女関係では、日本で離婚の際の子供の面接交渉にも言及する場面がありました。

講演終了後に回収されたアンケートでも「とても面白かった。「客観的」でないお話を生の声で聞けてよかった。先生のおっとりしたお人柄も素敵だった。大学の先生の授業が受けなくなった」や「フランス人の見方、考え方、現在のフランス語圏の事情をわかりやすく解説していただきありがたかった」など、大変な好評を博したことが見てとれました。

第2部のワインパーティでは、恒例のボジョレヌヴォを味わいながらの懇親・歓談でした。「フランス」という共通の話題があるだけに、会場は熱気につつまれ、ルーセル先生の周りにはあれを聞きたい、これを聞きたいという人が群がり、会員の好奇心の強さとルーセル先生の講演の魅力が窺われました。ルーセル先生も、これだけまとまった数の大学OBと歓談されるのは初めてとのことで大変喜んでおられました。話し足りなかったことは、ぜひ「LA NOUVELLE」に書いていただきたいとお願いしたところ、快諾いただき、第一面の記事になったものです。

今年のボジョレヌヴォの味も悪くありませんでしたが、幹事が力を入れて準備したオードブル・おつまみも大変好評でした。又、皆様に楽しんでいただける企画をしたいとします。毎回、出席者の人数を確定するのに腐心しておりますので、参加の場合には必ず事前申し込みを頂くよう、また、参加申し込み後出席不能になった場合には速やかにご連絡をいただくようお願いいたします。

藤倉洋一（昭45）

仏友会総会のお知らせ

日時：2009年4月25日（土）
午後2時 総会
2時30分～3時45分 講演会
3時45分～5時 懇親会

会場：大手町サンケイプラザ（東京メトロ大手町出口E1直結）
201,202号室
会費：5,000円

講師：中村 恵さん（昭58）
演題：【難民問題から学んだこと— UNHCR（国連難民高等弁務官事務所の活動を通して）
～UNHCR本部はジュネーブにあるために、特にフランス語と関わるエピソードを織り交ぜてお話するようにしたいとの講師のご意向です～

中村 恵（なかむら めぐみ）さんのプロフィール：

1983年に東京外国語大学フランス語学科卒業後、フランスに留学。外資系企業勤務を経て、1989年に国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に就職。ジュネーブ本部、東京事務所広報室勤務の後、ミャンマーにて援助現場での活動に従事。2000年末にUNHCRを退職し、その後、筑波大学大学院修士課程カウンセリングコース修了。

日本の民間からUNHCRへの募金窓口であるNPO法人『日本UNHCR協会』設立（2000年10月）にかかわり、現在は事業部シニアマネージャー。

◆申し込みは4月11日（土）まで。必ずお申し込みの上お越しください。
◆連絡先：富山絢子（昭39）
TEL 03-3392-7090 fax 03-3392-9473
Email: ANB73700@nifty.com

第1面のクイズの解答

- (1) barbe à papa (漫画の「Barbapapa」の登場人物と同じ発音)
- (2) 4割 (3) 5週間 (4) 2 (正確には52%) (5) 3 (6) 99.9
- (7) Bac (le baccalauréat)。現在Bacに合格するのは、同年齢層の63～64%
- (8) ピル (la pilule)。統計によると、18歳から46歳までのフランス人女性の5割近くがピルを服用するにもかかわらず、一人の出産数は2008年には平均2.02人になりました。
- (9) 1821